３　「日記」─中古の日記

21年度　福岡大学

★　次の文章を読んで、後の問いに答えよ。

　沼尻といふ所もすがすがと１すぎて、いみじくわづらひ出でて、遠江にかかる。さやの中山など、ａこえけむほども２おぼえず。いみじく苦しければ、天ちうといふ川のつらに、仮屋造り設けたりければ、そこにてｂ日ごろ過ぐるほどにぞやうやうｃおこたる。冬深く３なりたれば、川風４けはしく吹き上げつつ、堪へがたくおぼえけり。

　その渡りして浜名の橋についたり。浜名の橋、ｄくだりし時は黒木をわたしたりし、このたびはｅ跡だに５見えねば舟にてわたる。外の海は、いといみじくｆあしく浪たかくて、入江のいたづらなる洲どもに、こと物もなく、松原の　 Ａ 　なかより、浪の寄せかへるも、いろいろの玉のやうに見え、まことに松の末より浪はこゆるやうに見えて、いみじくｇおもしろし。

　それよりかみは、ゐのはなといふ坂Ａの、　 Ｂ 　もいはずわびしきを６のぼりぬれば、三河の国の高師の浜といふ。八橋は名のみして、橋Ｂのかたもなく、なにの見どころもなし。二むらの山の中にとまりたる夜、大きなる柿の木の下に庵を造りたれば、夜一夜、庵の上に柿Ｃの落ちかかりたるを、人々ひろひなどす。宮路の山といふ所こゆるほど、十月つごもりなるに、紅葉ちらでさかりなり。

　　嵐　 Ｃ 　ふきこざりけれ宮路山まだもみぢ葉のｈちらでのこれる

　三河と尾張となるしかすがの渡り、げに思ひわづらひぬべくをかし。

問１　傍線部ａで助動詞「けむ」を使っているのはなぜか。最も適当なものを次の中から一つ選べ。

　　１　越えてきたということを伝え聞いたから

　　２　昔の出来事を想像しているから

　　３　越えたはずであるが自分の記憶にないから

　　４　なぜ越えてきたのか、理由を推量しているから

　　５　越えてきたことを思い出しながら記しているから

問２　傍線部ｂ、ｃ、ｄの意味として最も適当なものを、次の中から一つずつ選べ。

　　ｂ　１　このところ　　　２　毎日　　　　　３　ふだん

　　　　４　一日くらい　　　５　何日間か

　　ｃ　１　うっかりする　　２　なまける　　　３　快方に向かう

　　　　４　腹が立つ　　　　５　火を起こす

　　ｄ　１　坂を下った　　　２　地方へ行った　　３　雨が降った

　　　　４　下流へ行った　　５　時が過ぎた

問３　傍線部ｅは何の跡か。本文の中から抜き出して記せ。

　　［　　　　　　　　　　］

問４　空白部Ａには動詞「しげる」に存続の助動詞「り」が接続したものが入る。それぞれをふさわしい形に活用させてすべてひらがなで記せ。

　　［　　　　　　　　　　］

◎問５　同じ光景について傍線部ｆでは「あしく」と言っているのに傍線部ｇでは「おもしろし」と言っている理由の説明として、以下の空白部に入る本文中の表現を、イ・ロは六字、ハは十字で抜き出して記せ。

海が荒れている様子を「あしく」と言っているが、視界をさえぎるものがないことを「　イ　」と示し、松原越しに見える、波が寄せては返す様子を「　ロ　」にたとえている。また、この箇所は古今集の

　　君をおきてあだし心をわがもたば末の松山波もこえなむ

という歌を模して「　ハ　」と表現している。

　　イ＝［　　　　　　　　　　］

　　ロ＝［　　　　　　　　　　］

　　ハ＝［　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　］

問６　空白部Ｂに入る副詞を一文字で記せ。

　　［　　　　　］

問７　空白部Ｃに入る最も適当な助詞を次の中から一つ選べ。

　　１　こそ　　２　は　　３　のみ　　４　さへ　　５　なむ

問８　傍線部ｈを現代語訳して十字以内で記せ。

　　［　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　］

問９　この文章の作者を次の中から一つ選べ。

　　１　阿仏尼　　　　２　藤原道綱母　　３　紀貫之

　　４　菅原孝標女　　５　小式部内侍

【確認問題】

１　傍線部１～４の用言の活用の種類（動詞の場合は活用する行も）を答え、他と活用形が異なるものを選べ。

　１（　　　　　　　活用）

　２（　　　　　　　活用）

　３（　　　　　　　活用）

　４（　　　　　　　活用）

　活用形が異なるもの〔　　　〕

２　傍線部５･６を、「ば」の用法に注意してそれぞれ現代語訳せよ。

　５＝［　　　　　　　　　　　　　　　］

　６＝［　　　　　　　　　　　　　　　］

３　二重傍線部Ａ～Ｃの「の」の文法的意味として適当なものを、それぞれ次から選べ。

　ア　主格　　イ　同格　　ウ　連体修飾格

　エ　比喩　　オ　体言の代用

　Ａ〔　　　〕　 Ｂ〔　　　〕　 Ｃ〔　　　〕

４　波線部「十月つごもり」について説明した次の文の空欄を埋めよ。なお、【　】には本文中の語を抜き出して答えよ。

　「十月」の月の異名は（　　　　　　）、「つごもり」は（　　　　　　）という意味で、季節は【　　　】が【　　　　　】なった頃である。

【補充問題】

５　作者は上京の道中にあるが、ここではどの辺りを移動しているか。現在の県名で答えよ。

　（　　　　）県から（　　　　）県

【解答】

問１　３

問２　ｂ＝５　ｃ＝３　ｄ＝２

問３　浜名の橋

問４　しげれる

問５　イ＝こと物もなく

　　　ロ＝いろいろの玉

　　　ハ＝松の末より浪はこゆる

問６　え

問７　１

問８　散らないで残っている（10字）

問９　４

【確認問題】

１　１＝ガ行上二段活用

　　２＝ヤ行下二段活用

　　３＝ラ行四段活用

　　４＝シク活用

　　活用形が異なるもの=２

２　５＝見えないので

　　６＝のぼったところ

３　Ａ＝イ　Ｂ＝ウ　Ｃ＝ア

４　神無月（かんなづき）・月末（末日）・冬・深く

【補充問題】

５　静岡（県から）愛知（県）

【現代語訳】

　沼尻という所も滞りなく過ぎて、（その後）ひどく病気で苦しみだして、遠江の国にさしかかる。小夜の中山なども、越えたのであろう折（のこと）もおぼえていない。ひどく苦しいので、天中という川（＝天竜川）のそばに、仮屋を造り設けたので、そこで何日間か過ごすうちにしだいに快方に向かう。冬が深くなったので、川風が激しく吹き上げ続けて、我慢できないように思われた。

　その（川の）渡し場を用いて（舟で渡って）浜名の橋に着いた。（この）浜名の橋は、地方へ行ったときは樹皮が付いたままの材木を渡していた（ものだったが）、今度は（浜名の橋の）跡さえも見えないので舟で渡る。外海（＝遠州灘）は、たいへんひどく荒々しく波が高くて、入江のつまらないいくつもの州に、他の（これといった）物もなく、松原が茂っている間から、波が寄せては返す様子も、（波に転がる）色とりどりの玉のように見え、実に松の枝先から波は越える（という『古今和歌集』の古歌の）ように見えて、たいへん趣深い。

　それより上流は、猪の鼻という坂で、言いようがない（ほどの）つらい坂をのぼったところ、三河の国の高師の浜という（所である）。（あの『伊勢物語』の）八橋は名ばかりで、橋のあとかたもなく、何の見どころもない。二村山の中に泊まった夜は、大きな柿の木の下に粗末な仮屋を造ったので、一晩中、仮屋（の屋根）に柿が落ちかかっていたのを、人々が拾ったりする。宮路山という所を越えるころは、十月の末日であるのに、紅葉が散らないで最盛期である。

　嵐も吹いてこないのだなあ、この宮路山には。まだ紅葉が散らないで残っている（のを見ると）。

　三河の国と尾張の国と（の境）にある「しかすが」の渡し場は（「そうはいうものの」という名のとおり）、本当にきっと（渡ろうか、渡るまいか）思い悩みそうでおもしろい。